

# 子どもの本と差別

—アメリカでの対応—

丸 本 郁 子

## I はじめに

今から数年前、日本の子どもの本の関係者は、『ちびくろ・さんぼ』が、アメリカや英国において、人種差別を含む問題図書として、児童図書館の棚から消え去りつつあると聞かされ驚いたものだ。そのいきさつは、当時、渡辺茂男氏によって、『子どもの館』<sup>1)</sup>誌上にくわしく紹介された。その記事には、そのほか『ドリトル先生物語』『シナの五人きょうだい』『ハックルベリー・フィン』などの児童文学の古典も、その中に現れる黒人の描き方に、差別意識や見下した類型化が見られるということで、批判の対象となっていることが書かれていた。さらに、そこには、人種間の対立と差別が存在するアメリカ社会において、本の評価も多様をきわめ、いかに困難であるかが、痛みと共感をもって紹介されていた。

このように子どもの本を、その中に含まれている差別意識を中心にして、再評価しようという動きが、アメリカにおいてどのように進展しているかは、その後、主として図書館関係の雑誌に紹介されてきた。<sup>2)</sup> それらの紹介に見られる基本的態度は、このようにある種の本をふさわしくないと指摘する動きは、一種の検閲行為なのだから、図書館としては、不当な圧力に対して、表現や思想の自由を守る立場に立たねばならないというもののように思える。しかし果して、この動きを、それだけの観点でとらえてよいのだろうか。

日本でも、子どもの本の中にある差別意識に対する取り組みは少しづつなさ

れている。特に最近目立ったものとしては、名古屋市の図書館の「障害者差別の出版物を許さない、まずピノキオを洗う会」が提起した問題への対応がある。<sup>3)</sup>しかし、全体の動きとしては、差別をされる側の意見も十分に考慮に入れての問題の掘り起こしは、まだこれからのように思える。この問題を考えていく上で、基本的に押さえねばならない点は何であろうか。それを探るために、この小論では、アメリカの社会で差別をなくそうと活動している1グループを紹介したい。その主張・活動・影響また反撥の例を見ながら、日本の子どもの本にある差別問題を考えていく素材としたい。

## II C I B Cについて

このグループは **Council on Interracial Books for Children** という。(以下C I B Cと略す) 「人種交流をすすめる子どもの本の協議会」とでも訳したらよいのだろうか。1966年に設立され、カーネギー財団によって、かなり潤沢に資金を供給されている。<sup>4)</sup>最初は、作家・編集者・挿し絵画家・教師・両親たちが、自発的に作ったグループとして発足し、その名が示すように、商業ベースで売られている子どもの本の中にある、人種差別を問題にすることから活動を始めた。その後、教科書も取りあげ、対象とする差別の範囲も広げ、少数民族差別・性差別・年齢差別などを含め、同時に、物質主義・個人主義・逃避主義・エリート指向なども糾弾の対象としている。

会の目的は、“Council programs are designed to promote learning materials that embody the principles of cultural pluralism”<sup>5)</sup>とあるように、今アメリカ社会に起っている大きな動きの一つである、多元的な文化を創造することにつながる。

会は年8回 *Bulletin* (会報) を発行している。これは新刊の子供の本や教科書の書評・推薦書リスト・文献紹介・差別を見分けるチェックリスト・関連する出版社の紹介・各地の図書館のサービス状態などを載せている。特集が組

## 子どもの本と差別子どもの本と差別

まれ、「老人差別」「プエルトリコ人差別」「保育問題」「障害者差別」などと問題別に事柄を論じ、本の紹介をしている。面白いのは、“Art Directors Take Note” 又は “Illustrator’s Show Case” と呼ばれている頁で、いわゆる minority といわれる画家の作品を載せ、彼らを本や雑誌の編集者に紹介をしていることだ。チャンスを掴みにくい立場の若者に、登場する場を与えようとする企画だ。これをもう一つ積極的にしたものが、毎年500弗の賞金をかけた、若い minority の児童文学作家のコンテストだ。

「教育者のための性差別・人種差別資料センター」(Racism and Sexism Resource Center for Educators) を設立し、現場で用いる資料を収集・出版している。コンサルタントの派遣や、教師の訓練プログラムも行っている。

又毎年、人種差別や性差別に関するワークショップや大学での講座も主催する。同時に、積極的に教師や図書館員のグループ、又マスコミに対し、運動に理解を求める働きかけをしている。

この会の基本的な考えをまとめた形で提供している文献は、1976年に出された *Human (and Anti-Human) Values in Children’s Books: New Guidelines for Parents, Educators and Librarians* (子どもの本にある人間〔そして反人間〕の価値) だろう。この本の大部分は1975年にアメリカで出版された子どもの本のうち、特に少数民族・女性問題などに関連する主題を持つ2,292冊をとりあげ、それぞれを後に述べる各基準に照らし合せて分析し評価を加えたものである。最初の部分に、この会の評価の意図と基準がまとめられているので、それを紹介しよう。

まず前提として、私達が人間性と考えている人間の性格の大部分は、生れつきではなく、“culturally conditioned behavior” (周囲の状況により条件づけられた行動) であるとする。つまり環境により人間性も変ると考える。子どもの本を、それに関係づけると、本とは、単に楽しい(又は悲しい)お話や絵の世界がそこにあるというだけではなく、著者や出版社の価値観を反映

し、その価値観でもって、子どもに働きかける一つの環境となっている。著者や出版社の持っている価値観も、また、その個人のものばかりとは言えず、その社会の支配的な考えを反映している。つまり子どもの本は、その社会の現状を維持するために働きかける役目を果していることになる。

アメリカの子どもの本の中に反映されている支配的な価値観は、CIBCによると、白人優位であり、伝統的役割りに縛りつける以外は女性軽視であり、上流階級指向であるという。子どもの本は、未来の大人に対し、この現在の社会構造を受け入れるように、直接又は間接に働きかけているとしている。そしてこの仕組みは、本の著者自身も、自分がその影響下にあると気付かないほど強力だという。

CIBCの立場は、人間性とその価値観は変り得るのだから、現在、社会の鏡として存在している子どもの本を、今度は、その社会を、より人間的な価値観を持つものへと作り変えていく母型として用いていこうというものだ。人間解放を助ける道具として、子どもの本を用いようというのだ。

無意識のうちに、私たちに働きかけ、大きな影響を与えるものの一つは、言語である。その意味で、CIBCは言葉使いに対して、厳しい態度をとる。差別の行なわれている現在の社会において、どの言葉を用いるかは政治的な決断だと言う。

Negro や Indian の代りに、Black や Native American が用いられる。minority とか non-white という表現も、その中に white や majority が良いものであるかのような印象が含まれるので、好ましくないと言う。その代りに third world (第三世界) を選び、これが Black, Chicano, Puerto Rican, Native American, また Asian American を総称する時に用いられる。

英語の表現で自然に用いられている、人間全体を指す時に男性名詞を使う習慣も、性差別の典型として指摘されている。“Each citizen must pay *his* tax” とか salesman, manpower, brotherhood などである。

## 子どもの本と差別子どもの本と差別

身心障害を持つ人々を日本ではハンディキャップを持つ人と言っているが、これも好ましくない表現だ。語源的に、**hand** に **cap** を持って乞食が通りで哀みを乞うたことから生れてきた言葉だからという。これは障害者が社会で、受身に他者に依存する状態を表す言葉として退けられ、**disability** とか **disabled person** が代りに選ばれている。このような言いかえは、最初のうちには奇妙に感じられるだろうが、言葉は習慣だから、次第に自然に感じられるようになるだろうと言っている。

次に、批判の対象としてあげられているそれぞれの主義 (ism) を紹介する。

**Racism** (人種差別主義) とは、人間をある人種に属しているという理由で、組織的に抑圧し、搾取することを指す。これは単なる偏見ではなく、偏見プラス権力である。

子どもの本の中に、この差別は色々な形で表される。その一つは「無視」である。実際にはそこに存在している第三世界の人々が、本の中に少しも登場しない、あるいは描かれても、添え物程度であることが多い。

次に多い差別は、第三世界の人々を安易に「みな同じ」と片付けるタイプだ。白人の子どもが、たとえば黒人の子どもを「ぼくと同じだね」と受け入れるというパターンをとる。白人が基準であり、その基準に合格した時に受け入れてもらえるというのであれば、それは差別そのものだ。この態度は、それぞれ異った文化・歴史・言語を持っている人々に対する侮辱だ。彼らは白人と同じになりたいと思ってもらえないと **C I B C** は言う。

第三世界の人々の文化の違いを認めている本も多く出て来ているのだが、そこに潜む問題点は紋切り型の表現だ。血に飢えたインディアン、おとなしいアジア人、個性も勇気もない黒人奴隷という描き方が相変わらず多い。彼らに変な英語を使わせることもよく用いられる方法だ。それで特徴を出そうとしているらしいが、彼らが劣っているという印象を与えるに過ぎない。

これらの本が子どもに与える影響は大きい。自分の仲間が、醜く、個性もなく、白人に依存し、反抗もしないという姿で描かれ、その文化を「奇妙なも

の」「劣ったもの」として常に読まされていたら、黒人・プエルトリコ人・インディアン・アジア人などになりたいと思う子どもはいるだろうか。CIBCが要求していることは、第三世界の人々を、一個の人間として描くこと・その民族のたどった歴史を認め、正當に扱うこと・文化の差を描き、それがステレオタイプに陥らないこと・抑圧と苦しみを描くと同時に、それに対抗している姿も描くことなどだ。

**Sexism**（性差別主義）は、主として女性差別を指すが、男性差別も含まれている。女性差別が、女性であるゆえに制度として加えられる抑圧であるのに対し、男性差別は、文化的な規制で、いわゆる「男らしさ」からはみ出したタイプの男性に加えられる抑圧を指す。伝統的に子育てや家庭作りは女性の役割りと決め付けられ、優しさを示したり、細かな仕事が上手なのは女性の「生れつき備った」性質であると考えられている。「女性的」という言葉は、「弱さ」「感情的」「依存的」などと結びつけられ、劣ったものという印象を与え、「男性的」とは、「強さ」「理性的」「個性的」と結びつけられ、優れたものとする傾向がある。ここで注として、CIBCは、家事や主婦業に反対しているのではなく、それらが全面的に女性に押しつけられ、男性には全く関係がないとされることや又家事を外の仕事に比べて、劣ったものとした描き方をすることが問題なのだと言っている。子どもの本の中で、女性が家事をしている姿を描くと同様に、他のことをしている姿を描くべきだし、男性が家事をしている事実も描いてほしいということだ。

CIBCの調べによると、子どもの本で、女性が主人公になることは少なく、大事なことをやりとげるのは男の子であることが多いそうだ。そのパターンは、動物物語の中でも繰り返されている。女の子が主人公の本は、男の子が買わないので、出版社が規制してしまうのも一因らしい。

**Ageism**（年齢差別主義）とは、主として老人蔑視をさす。子どもの本の中に現れるおきまりの老人像は、まがった腰、ダブダブの服、だらしなく行動のぐずいおじいさん、女らしさを失ったおばあさんなどだ。耳が聞えず、目が悪

## 子どもの本と差別子どもの本と差別

く、忘れっぽく、ガンコで、旧式、うるさくて、おせっかい焼き。つまり老人を馬鹿にするか、非生産的なやっかい者扱いにしているのだ。たまに、愉快的な老人も出てくるが、まれであるという。

「まだ若すぎる」という形の若年者差別もこの **ageism** の中に含まれる。このように子ども向けの本の中でも、反こどもの思想は、根深い所に潜んでいる。社会問題を、子どもの本にはふさわしくないと見做す考え方などは、典型的な **paternalism** だ。このような態度は、子どもたちの持つ理解力、興味、関心を、矮小視し、それによって子どもの可能性を狭めてしまうのであるから、非人間的な行動といえる。

**Handicapism** (障害者差別主義) は、社会の主流から、障害のある人々を締め出す形をとって表される。子どもの本の中で、障害を持つ人々のイメージは、他の差別と同様に、いくつかの好ましくない印象を与えるお定まりのタイプに分けられる。

一つは、哀れな存在としての姿だ。主として、その本の主人公がいかに情深く、親切であるかを示すために、その哀みの対象として、著者は「気の毒な」障害者を登場さす。

障害者を社会の欠くことの出来ない成員として描く、つまり、職場・家庭・学校などで必要とされる一人として描くことは、めったになされていない。結果として、障害者は、一段劣った人間、または、やっかい者という印象を与える。

最も多いステレオタイプは悪のイメージである。スティーブソンの「宝島」の例で解かるように、盲目・片足・せむしなどの障害は、無気味で恐ろしい雰囲気盛り上げるために使われる。おとぎ話の中の悪い魔法使いの姿の描き方はその典型だろう。

反対に、障害者を超能力を持つスーパーマンに描くステレオタイプもある。ヘレン・ケラーの伝記のいくつかに見られるように、そこには彼女に普通人の生活がなかったかのような描き方がなされ、他の障害者の努力をみすばらしく

感じさせるような飾りたてがある。

障害者を自己憐愍と欲求不満の殻に閉じ込める陰気な人物とするステレオタイプもある。えてして著者は、彼らが気持の持ち方を変え、積極的に出ていきさえすれば、自己の「運命」が切り開かれるのだという描き方をする。社会が障害者を閉じ込めていることに対しての正当な怒りを、単なる性格の問題に擦り替えているに過ぎない。

**Elitism, Materialism, Individualism** (エリート指向, 物質主義, 個人主義)。アメリカは民主主義の国であるから, 階級問題などは存在せず, だれでも努力をすれば, 目標が達せられるというのは単なる神話に過ぎない。アメリカの社会には, 差別の存在と共に, 物質的な幸せ・自分さえよければという個人主義・エリート指向の競争原理が支配的で, 子どもの本にもそれが反映されている。もちろん, 個性の大切さと, 利己的な個人主義とは区別される。個性とは, 生きもの一つ一つが, 他のものとは異なって持っている特質で, それがあるために社会が豊かになるものだ。

**Escapism, Conformism** (逃避主義・体制順応主義)。子どもの本の多くに, 現実逃避の傾向は見られる。困った状況に立たされても, 運が良ければ, お金持や偉い人が現れて助けてくれるというパターンをとる。おとぎ話の中の魔法も同様だ。良いファンタジィは, 想像力を刺激する。しかし, 現実にはしっかり目を向け, 自分で行動しようという気持を, 子どもから失わせるようなファンタジィならば不必要だとCIBCはいう。

以上にあげた各否定的価値観と共に, 文学的及び美的観点からの評価も加え, CIBCは一つのチェックリストを作った。先にあげた *Human Values in Children's Books* は, 1975年度に出版された関連主題を含む本を, このチェックリストにかけて評価をしている。次のような表である。

子どもの本と差別子どもの本と差別

	ART	WORDS		ART	WORDS		ART	WORDS	N. A.	
anti-Racist			non-Racist			Racist	omission			
						Commission				
anti-Sexist			non-Sexist			Sexist				
anti-Elitist			non-Elitist			Elitist				
anti-Materialist			non-Materialist			Materialist				
anti-Individualist			non-Individualist			Individualist				
anti-Ageist			non-Ageist			Ageist				
anti-Conformist			non-Conformist			Conformist				
anti-Escapist			non-Escapist			Escapist				
Builds positive image of females/minorities			Builds negative image of females/minorities				Excellent	Good	Fair	Poor
						Literary quality				
Inspires action vs. oppression			Culturally authentic			Art quality				

anti ——とあるのは、その思想が無いことを示し、non ——とあるのは、中立であることを示す。art は挿し絵、words は文章が、それぞれどうかを示す欄である。“Racist by Omission” とは、第三世界の人々が現れても当然と思われる場面であるのに、登場していないことを示す。“Racist by Commission” とは、明らかに絵や文章が人種差別をしている時に印がつけられる。

各本に、一頁ほどの分析の文章があり、それにこのチェックリストがつけ加えてある。

一例として、*School Library Journal* や *Horn Book* で好意的な評価を得ている Nicholasa Mohr の *El Bronx Remembered* (Harper & Row) に対し、CIBCが、人間の価値観という面から見て、どう評価しているかを次の表で見よう。

	ART	WORDS		ART	WORDS		ART	WORDS	N. A.
anti-Racist			non-Racist			Racist omission commi- ssion		✓	
anti-Sexist			non-Sexist			Sexist		✓	
anti-Elitist			non-Elitist			Elitist		✓	
anti-Materialist			non-Materialist			Materialist		✓	
anti-Individualist			non-Individualist			Individualist		✓	
anti-Ageist			non-Ageist		✓	Ageist			
anti-Conformist			non-Conformist			Conformist		✓	
anti-Escapist			non-Escapist		✓	Escapist			
Builds positive image of females/minorities			Builds negative image of females/minorities		✓	Excellent	Good	Fair	Poor
						Literary quality	✓		
Inspires action vs. oppression			Culturally authentic		✓	Art quality			

まとめてみると、このグループは、子どもの本の評価が、その文学的価値や美的な観点にのみ片寄ってなされていたのではないだろうかと問題提起をし、一歩進めて、本の中に込められている人間観からも評価をしないことを勧めているのだ。その意図は、“We hope it is understand that our function is not of censors but to raise awareness of realities that are too often ignored”<sup>6)</sup> とあるように、差別のある現状に気づき、目を向けてほしいという所にある。今まで、差別され、無視されるか、ステレオタイプでしか描かれていなかった人たちを、豊かな人間性を持った姿に描く、つまり、より真実な人間像を子どもに提供しようとしているのだ。大事な点は、本の評価の視点が180度の転回をし、今まで発言をしなかった差別されている立場の側から見たらこうなのだという発言が加えられたことにある。

### Ⅲ 影響および批判

C I B C の活動やその他の多くのグループの運動の影響として、この10年間ほどのうちに、アメリカの社会は、各種の差別が無意識のうちに行なわれてきたことを認め、それへの反省が広く行き渡ってきた。

マクグロウ・ヒルやスコットフォースマンなど大手の出版社や地方自治体政府は、教育・出版関係者に向け、差別につながる表現を用いないように手引書 (Guideline) を出している。fireman → firefighter, man-made → artificial, “Pioneers moved West, taking wives and children, with them.” → “Pioneer families moved West.” というような書きかえが行われている。

絵本の挿絵にも、白人と同様に黒人やその他の民族の子どもたちも多く描かれるようになった。男の幼稚園の先生や、女の医者・おまわりさんも登場する。父親がエプロンをかけ家事をする場面もある。

1972年にアメリカ図書館協会 (American Library Association) の児童奉仕部 (Children's Service Division) は、児童図書の再評価をする提案を委員会で採択した。

1976年には、アメリカ図書館協会 (A L A と略す) も全国大会で、反性差別・反人種差別宣言 (Racism and Sexism Awareness Resolution) をしている。<sup>7)</sup>

同じく1976年に、N C T E (The National Council of Teachers of English) もその全国大会で反差別宣言を採択し、カリキュラムを作り、授業で用いる資料作成に取り組む姿勢を示した。

個々の作品をみてみよう。ドリトル先生物語のシリーズの出版社は、その販売キャンペーンを止めてしまったし、文庫本の出版元も、これからリプリントをする計画はないと言っている。最近の推薦図書リストの中にも、この本はあまり含まれなくなっている。<sup>8)</sup>

『メアリー・ポピンズ』の作者、P. L. Travers も、その中の Bad Tuesday

(わるい火曜日) の一部の書きなおしをしている。そこを読む黒人の子どもが、それによって傷つけられてはいけないと言う理由だ。しかし、その他の場面に關して Travers は、C I B C から書き変える気がないかと聞かれても、否定している。<sup>9)</sup>

C I B C に対して、最も強力な反対勢力の一つは A L A の知的自由委員会 (Intellectual Freedom Committee) だ。1973年2月の *School Library Journal* に載っている Jamis A. Harvey 氏の意見が『現代の図書館』誌上に紹介されているが、そこに表された考えが、この側の代表的見解だろう。<sup>10)</sup> 彼によると、児童図書を再評価とみせかけて除去しようとする意図は、昔からの検閲と変わらない。表面的な動機は異っても、問題の根拠は常に道徳観にある。検閲者の常として、C I B C も、自分は社会に対する責任から行動していると信じている。問題の根源は、更に深く、道徳観も表向きの楯であり、真に用心しなければならないものは教育理念そのものにある。検閲者にとって教育の目標は、社会の生態を批判する思考力の養成にはなく、規範的知識を修得することにある。その規範に触れるものを、検閲者は、教えてはいけないと思いつ込んでい。このような教育は、隠れみものをつけたプロバガンダに過ぎないと言う。

*School Library Journal* も、1976年11月号の“Editorial”において、C I B C の活動を、著者や出版社に対する検閲行為そのものであると手厳しく批判している。<sup>11)</sup> 特に先に紹介したチェックリストに関しては、その形式主義を揶揄し、Beatrix Potter の『ピーター・ラビット』にそれを当てはめて皮肉っている。ピーターは、いたずらで活発、妹たちはおとなしく従順だから、これは性差別となる。マクレガーさんは、年寄りの偏屈で乱暴だから年令差別。物語と絵は、服や食物に凝り過ぎているから物質主義。言いつけを守らなかったピーターは薬を飲まされ、良い子だった妹はおいしい食事がもらえるとは Conformism。ピーターが、うまうまとマクレガーさんから逃げ出したのは、現実の厳しさからの逃避。他の人種の人について何も書いていないのは、

## 子どもの本と差別子どもの本と差別

無視するタイプの人種差別となりはしないかという調子だ。

『ジャズ・カントリー』の著者、ナット・ヘントフも、CIBCの示すガイドラインについて、そのようなものに従って書けと作者に言うことは、想像力を締め殺すようなものだとして反駁している。<sup>12)</sup> 作品の生命力が失われ、すべてが無味乾燥になる。子どもが、世の中の矛盾・対立を知らされなければ、彼らは、真の驚き・恐怖・人生の不可解さを知らずに過すことになる。CIBCが、集団として、政治的な働きかけをすることには賛成だが、作家に対しては、その個性を尊重し、放っておいて欲しいと述べている。

## IV ま と め

このCIBCの行っている積極的な差別との戦いの中には、私たち日本人が学ばねばならないものを多く含んでいると思う。子どもの本という、多くの人たちが触れ親しみ、そしてその人たちの行動や思考の基礎を築くものへと目を向けたこと。多くの差別の対象を広く含んだ運動であること。自分たちの主張を、きわめて平易・実証的に提示し、種々のレベルに働きかけたことなどである。

問題点は、子どもの本の再評価ということが、検閲行為だとして、上で見てきたように議論を呼ぶところにある。まずそのことを考えてみたい。

私たちが、子どもに読む本を備えるとき、個人であろうと、図書館であろうと、必ず多くの中からどれかを選ぶという作業をする。その時に、なるべく「良い」ものを選ぶ努力をする。ここまでの行為は別に検閲とは呼ばれない。その価値判断をする基準に、従来行なわれていたものに加えて、人間観も入れたいという主張自体は、視点を広げる意味で良いことだと思う。それを唯一の物差しとするのではなく、基準の一つとするのだ。偏見や差別の対象となっている人々を、あくまで無視したり、差別を助長するような真実から離れた姿に描いている作品を、その意味で欠点があると指摘することは、決して検閲行

為ではない。

ただし、描象的・理論的段階では、それが良いと分かっても、実行の段階になると、種々の問題が起きる。特にCIBCのチェックリストは、問題点を平易に提示するという効果はあるが、同時に、単純に割り切れないものを、いくつかのカテゴリーに当てはめる結果となり、形式的となったことは否めない。たとえば、女性差別をしているかどうかの判断にしても、何が女性のあるべき姿かということ自体まだ模索中なのであるから、それを簡単に差別かどうかきめられるはずがない。

また、図書館では、最終的にある本を置くかどうかの決断をしなければならぬ。それは一人の人間と同じように、個性的で多くの面を持つ一冊の本に白・黒をつけることになる。人間観に問題があるから置かないとか、そうであっても、他の面で秀れているから備えておこうという決断だ。思想・表現の自由を守るという観点からは、問題が部分的にはあっても、他の点で秀れた本であるなら備えておくことになるだろう。ただし、もしその図書館が、差別や偏見を助長する本のみを置けなら、それは「あらゆる立場」を公平に扱っていることにならない。

CIBCは、被差別者の姿を正しく書いた作品が少ないのは、その立場の人たちが作者となって作品を作り出していないことが大きな理由の一つだといっている。日本でも同じことが言えるだろう。『部落解放』が、CIBCと同じ意図で、部落問題という範囲内であるが、毎年文学賞を出し、その一部門に児童文学を入れているのも、新しい観点の作品を生み出す努力の一つだろう。障害者たちも、1981年の国際障害者年に向けて、「私たちが創造しよう。国際障害者年」という動きをしている。<sup>13)</sup> 大阪の障害者が中心になり、自分たちの姿を記録した文章・作曲・映像作品の公募をしているのだ。共通テーマとして「おおらかに、あっけらかんとさらけ出そう自分の姿」というのをあげている。これらが立派な作品にと完成されるのは、時間がかかるかもしれないが、そのための動きが始まったことは喜ばしい。

## 子どもの本と差別子どもの本と差別

私たちもここで、一般論として表現の自由を振りかざし、アメリカの動きを、冷たく「再評価病」<sup>1)</sup>などという言葉で片づけてしまわず、日本の子どもに与えられている本の中にある人間観がどうなっているかを、再検討してみる必要があるのではなからうか。一見極論に見える意見であっても、それが持ち出されることにより、それへの答を探す努力の中で、今まで忘れられていた問題が明らかになってくる。これは、先に触れた名古屋の図書館のピノキオ問題との対応の中で、はっきりと示されている。障害者の意見を聞いてみようといふ会を開いた時、その人たちのうち『ピノキオ』を読んでいる人は、ごく僅かだといふ重い事実を知らされたといふ。障害者が、読書の出来る状況に置かれていないことを、その時に知った訳だ。

このように見えていない人たちが視界の中に入ってくると、それが作品の中に、正しく登場することになり、その人たちが同じ欠点や悩みや喜びを持つ人間として子どもたちに認識されていくのだ。そのために、糾弾だとか、検閲行為だとかいって、議論することを避けたり、恐れたりすることなく、意見を闘わせることが必要だろう。そうすることにより、より真実で豊かな世界像を子どもたちに提供していくことが出来るのだから。

### 注

- 1) 渡辺茂男「常識の世界から—「ちびくろ・さんぼ」の評価」の一、二、三。『子どもの館』4：102—113，5：109—117，6：111—117，1973年9月，10月，11月。
- 2) 池田綾子「特集：図書館の自由Ⅱ，最近のアメリカの事情紹介—児童図書における知的自由に関して—」『現代の図書館』14（1）：19—23。河井弘志「アメリカの知的自由の思想と組織活動」『現代の図書館』14（1）：24—37。
- 3) 斎藤亮「発表Ⅲ，「ピノキオ」問題に対する名古屋図書館のとらぐみ」『昭和54年度全国図書館大会記録』p. 67—68。
- 4) “Editorial：The Would-be Censors of the Left” *School Library Journal* 23：7（November 1976）p. 7。
- 5) Council on Interracial Books for Children, *Human (and Anti-Human) Values in Children's Books*, 1976, p. vii。

- 6) Council on Interracial Books for Children, *Bulletin* 8 : 6 & 7 (1977) p. 3。
- 7) A L A のこれら二つの動きに対しては、その内部の知的自由委員会が、図書館憲章にそれらの動きが違反するのではないかと指摘したことにより、多くの議論がたたかわされた。
- 8) Isabell Suhl, "Doctor Dolittle-The Great White Father" *Racism and Sexism in Children's Books (Interracial Digest No.1)*, pp. 3-9。
- 9) Albert Schwartz, "Mary Poppins Revised : An Interview with P. L. Travers" *Racism and Sexism in Children's Books(Interracial Digest No.2)*, pp. 6-12。
- 10) 池田, *op. cit.*, p. 22。
- 11) "Editorial : The Would-be Censors of the Left, *School Library Journal*, 23 : 7 (November 1976) p. 7。
- 12) Nat Hentoff, "Any Writer Who Follows Anyone Else's Guidelines Ought To Be in Advertising," *School Libray Journal*, XXIV (November 1977) pp. 27-29。
- 13) "障害者の姿を記録しよう", 朝日新聞1980年9月6日。
- 14) 池田, *op. cit.*, p. 19。 (1980年11月)